

「中世の秋」を生きた教会の希望

— 2012年度後期公開講座「自然災害とキリスト教信仰」¹⁾より —

片 山 寛

1. はじめに

最近読んだ本ですが、『銃・病原菌・鉄』²⁾というのがあります。今年度の文庫本のベストセラーになっておりますので、皆さまの中にもお読みになった方があるかもしれません。非常に面白い本なのですが、そこに書かれていることを私なりに要約しますと、これまで地球上には様々な文明が存在したわけですが、自分たちにふりかかった様々な歴史的試練を受けとめて、その試練からよく学んで、社会的な変革をなしとげていった文明は存続し、それをしなかった、あるいはできなかった文明や民族は滅亡した、あるいは文明と文明の闘争の中で敗北していった、ということなのです。その人々が過去にどんなに偉大な文明を築き上げていたとしても、ただ漫然と、今までどおりで大丈夫だ、まだ何とかやれると考えて、将来の世代につけ回しをしていった文明は、滅亡しました。

しかしまた、時にはあまりにも大きな試練であったので、人間のどんな努力も無駄に終わって、滅亡した文明もあります。この本によると、たとえば16世紀に、スペイン人の掠奪者ピサロとその軍隊は、たった168人で、南米

1) 2012年度神学部公開講座は、9月24日から11月19日まで、毎週月曜日の18:30から、西南学院コミュニティー・センターのホールで行われた。片山の担当はその第6回、2012年11月5日であった。

2) ジャレド・ダイヤモンド『銃・病原菌・鉄——13,000年にわたる人類史の謎——』(上下巻)(倉骨彰訳)草思社2000年。草思社文庫版は、2012年。

ペルーのインカ帝国を征服してしまったのですが、インカ帝国の軍隊が8万人もいたのに、168人に負けてしまったのは、両者の武器の格差が大きかったことが一因でした。インカ帝国側はこん棒ぐらいしかなかったのに、スペイン側は馬とか鉄製の武器とかがあった。数少ないながら銃（12丁）まであって、これは戦争というよりほとんど一方的な殺戮、屠殺に近い状況だったということなのです³⁾。しかしもっと大きかったのは、それに先立って、スペイン人が新大陸にもたらした天然痘という病気が猛威をふるっていて、この本によると、結局、最終的には新大陸の住民の95%がこの病気によって死亡したということなのだそうです。新大陸の住民には、この病気に対する抵抗力ができていなかった。病原菌に対して抵抗力、いわゆる「抗体」Antikörper, antibody ができて、多くの人々に免疫ができるまでには長い時間がかかります。それが間に合わなくて、病気がひとつの文明をほとんど葬り去ってしまいました。その実例がここにあります⁴⁾。

今日の日本も、自然災害と原発事故という、大きな試練の中にありますが、私たちがもしこの試練から学んで、よく考えて適切な社会変革をなしとげたならば、……たとえば、原発を必要としないような、エネルギーの消費を抑えた低エネルギー社会を作り上げるならば、あるいは南海トラフの巨大地震に備えるような街づくりに成功するならば、私たちの文明はなおも何百年も存続するかもしれません。しかしただ漫然と、まだまだこれまでどおりでやれると考えて将来への備えを怠るならば、やがては日本のみならず地球の人類文明全体の滅亡ということになるかもしれません。その可能性は否定できないように思うのです。

2. 黒死病の恐怖

今回私は、先週の金丸英子先生の講座に引き続いて、中世ヨーロッパの14世紀に大流行した黒死病というペスト（疫病 plague, pandemic）についてお

3) 上巻99（文庫版121）頁以下。

4) 上巻114（141）頁以下、288（358）頁以下、下巻226（277）頁以下。

話いたします。金丸先生と私の主題が重なってしまったのは、それ自体は偶然でありまして、打ち合わせを十分にしないで、この講座の準備をしてしまったということに過ぎないのですが、しかしまたある意味では必然的でもあります。というのは、この黒死病 the black death, der schwarze Tod という病気こそ、キリスト教社会が過去に経験した、おそらく最大の自然災害であり、最大の試練であったということは、多くの学者の一致した見解であるからです。今回の連続講座のテーマは「自然災害とキリスト教信仰」ということでありますので、黒死病をキリスト教会がどのように受け止めたかをテーマにすることは、ごく自然ななりゆきだと言えます。

様々な情報を総合しますと、それは、当時のヨーロッパ社会のおよそ三分の一の人々が死亡したという物凄い被害でありました。全人口の三分の一というのはもちろん平均値でありまして、一般に都市部ではもっと大きな被害が出ました。たとえばローマは、人口の約半分が死亡した、と当時の記録にあります⁵⁾。

当時のヨーロッパの総人口をどのように考えるかで、犠牲者の数は変わってきますが、およそ2千万人から3千万人の人々が、命を落としたと考えられています。しかもその人々は、非常に苦しい、無残な仕方で死んでいったのです。最初、脇の下や鼠蹊部のぐりぐりが膨れて、それが血のかたまりのように黒くなり、さらにそれが全身に広がってゆく。ひどい場合にはいたるところにこの斑点ができて、身体じゅうまっ黒になって死んでゆく。また多くの記録に、理由はよくわからないのですが、死ぬ直前の人々はものすごく臭かった、と言われていています。黒死病の発病から死亡まではわずか数日でした。発病して、死ぬ確率はほぼ7割。発病したらまず助からない病気だったのです。これも未だになぜかはわかりませんが、胸部の激しい痛み、あるいは激しい頭痛があり、患者の多くは最後には錯乱状態になって、大声で意味のわからないことを叫びながら、家族とまともにお別れを言うこともできずに、苦しんで苦しんで死んだのです。中世の人々にとっては、死ぬことその

5) Klaus Bergdolt, *Der schwarze Tod in Europa: Die Große Pest und das Ende des Mittelalters*, Verlag C. H. Beck, München 1994, S.50. 邦訳『ヨーロッパの黒死病—大ペストと中世ヨーロッパの終焉』(宮原啓子・渡邊芳子訳) 国文社 1997年。

ものよりも、このような死に方の方が怖かった。「黒死病」the black death という言葉は、その恐ろしさと絶望を伝えています。

中世ヨーロッパの人々にとって、死ぬことそのものは、もちろん怖いですが、しかし一般に彼らは、私たち現代人ほど死を怖がってはいませんでした。時が来たら誰でも死ぬわけですし、場合によっては死ぬ方が救いでもあった。フィリップ・アリエスというお墓の学者が言っておりますけれども、中世の人々には、言わば「死に方の作法」というべきものがある、それを守って死んでゆく。それをきちんと守れる限りにおいて、天国に行くのと言わば約束されておまして、人によって早い遅いの違いはありますけれども、最後には間違いなく天国に行ける、大丈夫だ、と信じられておりました⁶⁾。

当時は医療技術が発達していませんから、病気になったら先ず死を覚悟しなければなりません。いよいよ最期が近づいたと知ると、中世の人々は、先ず家族や友人など、親しい人々を枕辺に呼び寄せる。そして一人一人にお別れを言うのです。それから教会の司祭つまり神父さまにきていただいて、「終油」unctio extrema という儀式をする。これは、「病者塗油」とも言って、香油（においあぶら）を額に塗ってもらう儀式なのです。それから最期の聖体拝領をする、つまりホスティアと呼ばれるパンを口に入れてもらう。聖餐式をするわけです。こうした仕事がすべて済みましたら、後は、身体を東の方角に向けてもらって、死が訪れるのを待つのです。東の方角を向くのは、イエス・キリストがやがて終りの日に再臨なさるのですが、その場所は、エルサレムだと信じられていたからです。ヨーロッパから見てエルサレムは東の方角にありましたから、彼らはキリストの再臨をお迎えする姿勢で死ぬことを願ったのです⁷⁾。

これが「死に方の作法」というものでありまして、それを守れば安らかに死んでゆけるのですが、黒死病の場合には、それが守れないのです。むしろ、もしかしたらこの人は地獄に真逆さまに落ちて行くのではないかと

6) フィリップ・アリエス『死と歴史 — 西欧中世から現代へ』みすず書房 2006年、15頁以下。

7) TRE, S.744 f. 拙論「古代・中世の教理史における死と葬儀」『西南学院大学神学論集』第66巻第1号、2009年、35頁以下参照。

思えるような死に方しかできない。そのことが、中世の人々を本当に苦しめたのであります⁸⁾。

3. 黒死病の流行

中世には様々な疫病つまりペストがヨーロッパを襲ったのですが、14世紀半ばのこのペスト、黒死病ほどすさまじいもので、多くの命を奪い、深刻な影響を後々の社会に与えたものは他にありません。

黒死病という病気の流行の経過そのものについては、先週、金丸先生がお話してくださいましたことに付け加えるような内容は何もありませんが、ただ皆様が先週の内容を思い出してくださるために、ここでごく簡単に、ドイツで作られました映像⁹⁾を使って、この黒死病の流行についてご紹介しようと思います。

この映像の最初に、これは本題とは関係ないのですが、ドイツのケルン大聖堂を現代からずっと遡って、写真と絵で追った絵がありますので、これもお見せしたいと思います。ケルン大聖堂は700年もかけて建築された教会です。その変化が面白いのです。現代とはずいぶん違う中世の世界に、旅をするような気持ちをご覧ください。

1 (前兆)

西欧中世の数多くの出来事の中で、ペストほど人々の心に強い印象を残したものはありません。現代になってもなお、このペストという病名は身ぶるいするような恐怖を呼び起こすのです。今日では、この悲劇の原因はほぼ突き止められているのですが、中世の人々にとっては原因はまったくわからず、ただ世の終わり Apokalypse、つまり神さまから人間に下された罰を思わせ

8) cf. Bergdolt, op. cit., S.88.

9) *Die Stadt im Mittelalter, Alltagsleben hinter Turm und Mauern*, Verlag Sauerländer Aarau, Bergisch Gladbach/Köln 1995.

るものでした。1346年から1350年にかけての流行で、ヨーロッパの人口の約三分の一が失われました。

14世紀の初めごろから、様々な気候の異変が見られて、人々は非常に不安を感じていました。何か月も雨が続きたり、気温が下がって農業被害がありました。また各地で戦争が続いたり、彗星が観測されたりしました。これらは、聖書の黙示録に言う、最後の審判の始まりではないかと思われました。ペストの襲来の少し前（1348年1月25日）には北イタリアのフリウリ Friuli で大地震があって、イタリアとオーストリアで1万人ほどの人が亡くなりました。これらは後に、ペストの前兆であったと理解されました。

今日では、ペストが起こった本当の原因はかなりよくわかっています¹⁰⁾。

2 (原因)

ペストの原因であるペスト菌は、最初はネズミにたかるネズミノミを宿主としていますが、この細菌はノミ自体には害を及ぼしません。ネズミは中世の家々や物置や貨物船には非常に多く生息しており、これがペストの温床になりました。ネズミは一つの家や地区に何千匹もいたのです。

ノミの媒介によって家ネズミがペスト菌に感染します。そして家ネズミがペストで死ぬと、行き場を失ったノミは仮の宿主を求めて、近くの人間にたかるようになります。ノミによって皮膚から感染するのを腺ペスト (Beulenpest) といい、人間から人間へと空気感染するものを肺ペスト (Lungenpest) といいます。どちらも人間にとっては致命的でした。

3 (治療法)

中世の医者たちは、ペスト菌に対してもその危険性についても何も知りま

10) 黒死病の原因については、1894年に香港での疫病のさいに発見された「ペスト菌」によるものというのが定説だが、1984年に英国で炭疽菌説、次いでウイルス性の出血熱説が出て以来、議論がつづいている。14世紀の黒死病は、ペスト菌によるものとしては被害が大きすぎるというのが主たる理由である。未知の病原菌によるとの可能性は否定できないが、ここでは定説に従いたい。ジョン・ケラー『黒死病——ペストの中世史』中央公論新社2008年、358頁以下参照。

せんでした。彼らは他の人々と同じく、この病気に対してどうしたらよいかかわからず、ただ慌てることしかできませんでした。もちろん様々な理論が生まれて主張されました。彼らは、それは恐ろしい南風から来るのだしたり、不潔な水の蒸気が疫病を運んで来るのだと主張しました。それに対して多くの人々は、ペストが腐った食べ物から来るのだと考えて、それを避けることを主張しました。お酢がそのためによいと主張して、これを飲むと予防になるとする人々もいました。

医者たちは治療法を求めて、少しでも害になりそうなものを患者から遠ざけたり、逆にありとあらゆる薬草や香水や粉末などを混ぜ合わせたりして、何か隠れた効能があるのではないかと期待しました。しかしすべての努力は空しく、患者たちの救いにはなりませんでした。

4 (経路)

1346年から1350年までにヨーロッパを襲ったペストが、どういう経路をたどってやってきたのかについて、現代の科学はかなり詳しくその跡をたどることができます。この時代に商業が発達して、遠くの国々との交易が盛んになったのはよいことだったのですが、それが同時に疫病という災いを遠くに運ぶことになりました。ペストは、中国（中央アジア）から出発し、シルクロードを通過してやってきました。1347年の初めに、ペストは黒海北部のカファに到達し、その数ヶ月後にはコンスタンティノープルに到達しました。その勢いは非常に強く、たちまち広がって、アドリア海岸にまで疫病は広がります。ヨーロッパは非常に危険にさらされました。

その年の秋には、病気はシチリア島のメッシーナに上陸します。つづいてジェノヴァ、ヴェネツィア、マルセイユなどの港町が襲われます。次の年、1348年の夏にはアルプスを越えて最初の犠牲が出ます。ミュールドルフ、冬にはバーゼル、一月遅れでケルン、その更に一年後、1349年にはスカンディナヴィアとイングランドでもペストが荒れ狂いました。ヨーロッパを「黒い死」が支配したのです。

5 (社会的影響)

ペストは、ただ単に、パニックや不安や驚きだけを引き起こしたのではありませんでした。それはすべての公共の福祉を破壊しました。各人が、自分が生き延びることだけを考えるようになったのです。この時代を自ら語る証人の言葉をいくつか聞いてみましょう。

「(死体を片付けようとする者は誰もいなかったので) 人々はとうとう必要に迫られて、国の費用で何人かの男たちを雇い入れた。彼らはヴェネツィアの町々を縦横につなぐ運河を小船で回り、放置された家から死体を運び出し、それをサン・マルコ・ボッカマーラ、あるいはサン・レオナルド・フォッサマーラといった島々に運んだ。そして、そこにあらかじめ掘っておいた広くて深い穴の中に、死体を積み重ねるようにして投げ込んだ。家から運び出す時点では多くの人々がまだ死んでおらず、小船の上に乗せられてからことされる者があつたかと思うと、それでもまだ生きており、墓穴の中で絶命した者さえもあつた。小船を漕いでいった人々の多くも、やはり後にペストに侵された。放置された家の中には、高級な家具、お金、金や銀などがそのまま置いてあることもあつたが、泥棒がそれを盗んでゆくこともなかつた。すべての人々が、信じられないほどの脱力感とパニックに陥つたからである」¹¹⁾。

都市部でも田舎でも不安と驚きが人々を支配しました。人々はお互いに非常に警戒して、必要があつても会わないようにしました。教会では絶え間なく葬儀があり、しまいには葬儀をすることそのものを放棄してしまいました。

「多くのひとが誰にも看取られずに死に、非常に多くの人々が飢えた。つまり、もし誰かが病床についてしまうと、家族の者は恐怖にかられて、家の中の病人に向かつて『医者を呼んで来る』と言って、そつと道路側の戸口のドアから出て行き、二度と戻つてはこなかつた。こうして病人は先ず家族か

11) Bergdolt, op. cit., S.52.

ら裏切られ、次いで食糧からも断ち切られた。さらに熱が出て来ると、状態はもっと悪くなった。夜毎に、多くの病人が近親者に見捨てないでくれと訴えた。すると近親者は、『自分でパンとワインと水を食べなさい。そうすれば世話してくれる者を夜中にそのつど起こさずにすむ。そして昼夜わかたずその人の世話にならずにすむ。これらの品をベッドの枕元の椅子の上に置いておくから、自分で何とかしなさい』。病人が眠り込むと、近親者は出て行き、戻ってはこなかった¹²⁾。

病人が出た家の中に入ってゆく勇気のある者はほとんどいませんでした。そこで家の周辺にはいつまでも死体が腐乱した臭いがただよっていました。教会の司祭も、息子も、父親も、近所の人々も入ってゆこうとはしなかったのです。

6 (ユダヤ人ボグロム)

ペストの日常は、人々の正気を失わせました。そして他人への配慮なく自分のことだけを考える人々が多く出ました。ペストは神からの罰ではないかと思われ、その説明がつかないために、誰かが罪を犯したためにこの災難が起こったのだという犯人探しが始まりました。この場合には、ユダヤ人たちがその罪ある者だと彼らには見えました。恐ろしいユダヤ人迫害(ボグロム)が、この迷信の結果として起きたのです。

暴徒がユダヤ人を襲い、ユダヤ人の女性、子ども、そして男たちを、その信仰のゆえに焼き殺しました。この当時すでに、人間こそ人間の敵であったのです。死があらゆる恐怖によってヨーロッパを支配しました。そしてその百年後になっても、人々は激しい身震いとともに、このことを思い出すのでした。

12) *ibid.*, S.62.



ユダヤ教徒の焼殺 1349年¹³⁾

7 (ペトラルカ)

フランドルの画家ピーター・ブリューゲル1525-69は、黒死病の終焉から160年後に「死の勝利」という絵を描いています。その中でブリューゲルは確かに意識して、この巨大なペストの伝説を題材にして、それが町々や民衆や家族をバラバラしてしまい、多くの無実の人々が命を失ったようすを描いているのです。

13) *Die Annalen de Gilles li Muisit, Tournai, um 1353* の手写本の中の挿絵。「ユダヤ教徒には、キリスト教徒を殺害するためにいたるところで井戸に毒を投げ入れたとの嫌疑がかけられた。この火炙り（異端者とユダヤ人によく行われた処刑方法）は、燃える薪で満たされた穴の中で行われている。それは、この人々のグループを待っている地獄の罰を導入する序曲だと考えられていた」Heinz Schreckenberg, *Die Juden in der Kunst Europas. Ein historischer Bildatlas*, Göttingen/Freiburg im Breisgau 1996, S.371.



中世の偉大な文人ペトラルカ1304-74は、ペストを直接に経験した人々の一人でした。彼は1348年にペストの流行のただ中で、次のように書いています。

ああ、わたしは何を耐え忍ばねばならないのか
いかなる激しい苦しみが、運命として私の前に立ち塞がるのか
私は、滅びに向かって突進してゆく世界を見ている
若者も老人も、いたるところで群れをなして死に向かってゆく
安全な場所はどこにもなく、すべての港がその湾口をとぎす
救いを待ち焦がれても、希望はもはやない
ただ無数の葬列を見るだけだ、どこを見回しても
それが私の目をさまよわせる
教会は嘆きに満ち、棺桶がいたるところにある

生前の身分には関わりなく、高位の者も卑しい者のかたわらに横たわる
今、魂は自身の終りの時を見つめている
私もまた自分の終りを数えねばならぬ
ああ、愛する友らは逝ってしまった、快い会話は消え失せた
愛らしき人びとの顔が、突然、色あせてしまったのだ
地上はすでに、墓を掘る余地すらもないのだ

(ペトラルカ「自分自身へ」Ad se ipsum, 1348年)¹⁴⁾

4. 黒死病後の西欧社会

以上、映像の助けを借りつつ、黒死病の襲来の簡単な経過をお話ししました。ここに、人類をかつて襲った最大の、とは言わないまでも、最大の災害のひとつがあるのは間違いありません。それはヨーロッパの人々の心に、何世紀もの間、消えない印象を植え付けました。それは「トラウマ」という言葉がぴったりします。今にいたるまで、「ペスト」という言葉には恐ろしい、ぞっとするような響きがへばりついているのです。

ペスト（黒死病）が西欧のキリスト教社会にもたらした影響については、先週の金丸先生の講義が、正確に述べてくださっています。私はそれに何か付け加えるようなものを持たないのですが、最初に述べましたテーマ、つまり中世のキリスト教社会、そして中世のカトリック教会は、ペストから何を学んだのか、そしてそれを教訓にして、何かよい社会変革をなしとげたのか、ということに関して、自分なりに二、三のことを述べさせていただこうと思います。

① 封建制を支えていた互酬関係のゆるみ

ひとつは、中世の封建制を支えていたものが、黒死病をひとつのきっかけにして、がたがたと崩れて行ったということです。これは研究者たちにより

14) Francesco Petrarca, *Epistola Metrica*, I, 14, l.1-14.

ますと、ペストだけが原因ではなくて、それ以前からゆっくりと進行してきたプロセスなのですが、ペストがそれを決定的に早めた、ということには、疑いありません。

そもそも封建制とはどういうことかという、それは基本的には親から子へと仕事を受け継がれてゆく社会だということです。親子代々その同じ仕事をしている。親子と言っても、実子とは限らなくて、養子をとる場合もありますし、弟子たちを育てて、その中で出来のよい者を自分の娘と結婚させる場合もありますが、とにかく、親あるいは擬制的な親であるところの親方が子どもを育てる、教育する、そして一人前になったら仕事を譲ってゆく、それが基本構造をなしている社会なのです。「身分社会」とはそういうことです。それは「家」というものが基本的に生産共同体であり、仕事場であった時代でした。貴族の家から庶民の家まで、基本的には同じです。そこでは、親が子どもを愛して土地・財産（生産財）や知識を与えることと、子どもが親を尊敬し、親が年老いたならば介護する、といういわゆる封建的互酬関係が、家族の中だけでなく、社会全体のルールでもあったのです。

ペストはそれを、一時的にはありますが、完全に破壊しました。ペストが一つの町で荒れ狂うのは数カ月から長くて1年ぐらいですが、その間、人々は、先ほどの映像にもありましたように、たとえ子どもでも見殺しにして逃げる、親でも捨てる、そうでなければ生き残れない、という状況にさらされたのです。

やがてペストが去って、秩序が回復したときに、生き残った人びとはそれまでよりもお金持ちになっていました。封建社会において3分の1もの人々が一挙に亡くなれば、生き残った人びとの財産は当然増えます。もちろんそれ以降も封建社会は続きますから、親子の互酬関係も回復いたします。しかし人びとの心は、以前のように平和ではなかったのです。

黒死病が荒れ狂ったのは、1347年から50年ぐらいで、これを「大ペスト」die große Pestと呼んでいるのですが、その後もこの病気が完全に消滅したわけではありませんでした。その後も小規模ながら各地で、思い出したようにこれが流行して、その噂を聞くたびに人々をぞっとさせます。特に最初の

流行で被害が少なかったか、あるいは幸運にも被害を免れた町、たとえばニュルンベルクとか、ヴェルツブルクとか、プラハ（1359年）なども、遅かれ早かれやがてはペストに襲われることになります。ヨーロッパで黒死病が唯一来ていなかったアイスランド、これはずっと北の方の島だったからですが、その島にも結局、50数年後の1402年に大流行が起こって、人口の約半分が死亡しました¹⁵⁾。

要するに、ヨーロッパの人々は、ペストの恐怖を忘れようにも忘れられなかったのです。たとい日頃は忘れていても、いつまたあの恐ろしい災害が起こって、親が子を捨て、子が親を捨てることになるのではないか。ユダヤ人のような罪のない人々を虐殺してしまうことになるのではないか。その恐怖は長く残ったのです。もしかすると、今でも残っているかもしれません。

当時の証言に、次のようなものがあります。

「昼夜を分かつずに、街頭で息絶える者の数は知れず……自分の家で息を引き取る者の数はさらに多かったが、遺体が腐敗し悪臭が漏れ出て来て、初めて近所の人に気づいてもらえるようなありさまだった。こういうふうにならまわらず死んだ者たちの臭いがあたりには満ちていた」。

「隣人同士がお互いを避けるだけではなかった。……この疫病は、男女を問わず、人々の心に大きな恐怖を植え付けたので、兄が弟を、叔父が甥を、妹が兄を、さらには妻が夫を捨てることもざらだった。だが、もっと忌むしく、ほとんど信じ難いのは、父母が実の子に対して、まるで赤の他人であるかのように、看病や世話を放棄したことだ」¹⁶⁾。

ペストはヨーロッパの人々のトラウマだ、と述べる人が多くいます。

ちょうど現代の私たちが、あの東日本大震災と福島第一原発の悪夢を抱えて生きているように、ヨーロッパには長く、ペストへの恐怖が生きていまし

15) William Naphy – Andrew Spicer, *Der Schwarze Tod. Die Pest in Europa*, Magnus Verlag, Essen 2003 (original: *The Black Death. A History of Plagues 1345-1730*, Tempus Publishing Ltd, Stroud 2000) S.30.ただし、アイスランドのペストについては、黒死病ではなかったとの見解もある。Cf. Ole J. Benedictow, *The Black Death 1346-1353. The Complete History*, The Boydell Press, Woodbridge (UK) 2004, p.216.

16) ボッカッチョ『デカメロン』第一日より。ジョン・ケリー『黒死病』（前掲）146-7頁参照。

た。ある意味でペストこそが中世の封建社会を終わらせ、宗教改革、そして近代社会を生み出したのかもしれない¹⁷⁾。

② 激しい現世的喜びへの希求と、(厭世感と結びついた) 敬虔な信仰の併存

オランダの歴史学者であったヨハン・ホイジンガ1872-1945が、『中世の秋』という古典的名著(1919年)の中で書いているのですが、中世の末期、ペスト以降に生きていた人びとの多くに共通して、激しい現世的喜びを求める心情と、敬虔な信仰とが同居していたというのです。同じ一人の人間が、現世的快楽主義者であり、同時にこの上なく敬虔な信仰者である、という矛盾が、矛盾ではなかった時代が、中世の秋なのでした。

「ほとんどわたしたちには理解しがたい矛盾は、そのまま矛盾としてうけとるべきである。

この時代、異様なまでのはで好みに、きびしい信心がふしぎにまざりあっていたという状況も、すべてこの矛盾に発しているのである。信仰は、絵画、貴金属細工、彫刻に、はでに飾りつけられていたが、人生、思想の諸相を、あますところなく、いどどりはなやかに飾り立てたいという、とうてい制御不能の欲求は、なおそれ以上を望んだ。聖職者の生活のよそおいにさえも、ときとすると、色と輝きへの渇きが認められるのである。

修道士トマは、ぜいたくをはげしく攻撃し、過度をきびしくいましめた。ところが、そのかれが説教のときに立つ木組みの壇は、民衆の寄進になる、とてもこれ以上のものはなかりとういほどの、ぜいをつくしたつづれ織りでおおわれていた、とモンスターレルは報じている¹⁸⁾。

ペストの後、社会倫理のたがが外れて、非常にきわどい服装が流行ったり、たとえば女性の服装でほとんど胸を丸出しにした服装が流行ったり、そうかと思うと、逆にこの世のすべてを捨てて巡礼の旅に出る人々が増えたり、極端な場合には、鞭打運動に参加したりする¹⁹⁾。そういう二極化したものが併存したのです。

全財産を教会に寄付する人が出るかと思うと、教会の墮落した聖職者たち

17) cf. David Herlihy, *The Black Death and the Transformation of the West*, Harvard University Press 1997, especially pp.59-81.

18) ホイジンガ『中世の秋』第13章、中公文庫版(堀越孝一訳)下巻16頁。

19) 鞭打苦行者については、蔵持不三也『ペストの文化史——ヨーロッパの民衆文化と疫病』朝日選書、1995年、80頁以下参照。

を嘲笑したり糾弾したりする文書がたくさん出回りました。それはホイジンガの言うように、単なる矛盾ではなくて、これこそがペストの後の時代の特徴だったのです。

「マッテオ・ヴィラーニ Matteo Villani によれば、多くの人々が『疫病発生以前には決してしなかったような、恥知らずな振る舞いをしたり、奔放な生活を送っていた。ひとびとは何もしないということに没頭し、無制限に飲食にふけり、宴会と酒場を好み、楽しいこと、ぜいたくな食事や賭博を重んじた。ためらいなく贅沢に打ち込み、目立つ衣装を身につけ、異常な流行に熱中した。ふしだらに振る舞い、次から次へと新たな刺激にも順応した……』とある」²⁰⁾。

5. 中世の教会と黒死病

それでは、当時のキリスト教会は、ペストをどのように受け止めたのでしょうか。ペストから何を学んで、それを何か有効な社会改革に結びつけたのでしょうか。これが今回の講座のテーマですので、私はいろいろ調べてみたのですが、その結論は、「彼らは何もできなかった」ということであります。実際に何もできなかった。当時の一般の人々と同じです。客観的にみれば教会はただただ狼狽して、慌てていただけだったと言えます。

私は、当時の教会の公会議や教皇教書の記録が残っておりますので、これを探してみました。当時は、ローマ教皇クレメンス6世(1291-1352)の時代(1342-1352)なのですが、ペストに関わるような公会議は一度も開かれていません。クレメンス6世はこの時代の教皇としては良心的にふるまった人だと評価されている人なのですが、ペストの猛威の前では無力でした。彼ができたことはただ、(1348年9月の教書で)ユダヤ人への迫害を禁止したことと、ペストが終るようにと公の礼拝で神に祈ったことぐらいであり、両方とも効果はありませんでした。

クレメンス6世は、アヴィニヨンがペストに襲われた1348年5月に、市民を捨てて逃げ出したことでも知られています。インテリで自信たっぷりであ

20) K. Bergdolt, op. cit., S.154 f.

心的な人でしたが、個人的には臆病な人でもありました。

ペストの流行した時期の彼の簡単な年表を掲げます。

クレメンス 6 世（在位1342-1352）

- 1348年 クレメンス 6 世、天文学者に命じてペストの天体学上の原因を研究させる。また外科医に命じてペストの犠牲者の解剖をさせるが、原因はわからなかった。
- 1348年05月 クレメンス 6 世、黒死病のさ中のアヴィニオンから避難する。
- 1348年07月06日 教皇教書 「……ユダヤ人がペストの原因だとする説には信憑性がない。ユダヤ人自身がペストの被害者になっているからである」。
- 1348年秋 教皇、アヴィニオンに帰還。司祭たちの死亡率の高さに驚き、病人が最期の告悔や終油の秘跡を受けずに死んでいる現状を打開するため、そのことによる霊的な罰を免責した（総赦免）。
- 1348年09月26日 教皇教書 スペインからドイツにかけて広まっていたユダヤ人への強制改宗、財産没収、不法な殺害を禁止。しかしほとんど効果はなかった。
- 1349年10月20日 教皇教書で鞭打苦行者を地方の司教が取り締まるよう命ずる。「鞭打苦行者たちは信仰を口実に、ユダヤ人の血を流している……そして時にはキリスト教徒の血も……。大司教、付属司教…に命ずる。あの一団とは距離を置き、決して関わりを持つな。」

ペストとはいったい何であるのか。圧倒的に多くの人々が信じていたのは、これが神さまからの罰だということなのですが、クレメンス 6 世はそのことについては、教書の中では何も述べていません。説教の中で、人間の罪深さが神の怒りを蒙ったのだ、ということは言っているようなのですが²¹⁾、公文書としては残っていないのです。

教会が有効な対策をとれないでいた大きな原因は、聖職者の死亡率が非常に高かったことです。特に、地域の教会で働く司祭たちは、病人が臨終のときに、そこに立ち会って最期の告白を聞き、彼らの生涯に犯した罪を軽減するという役割がありましたから、ペストが流行し始めると、患者から告白を聞くうちに感染して、真っ先に倒れてしまいました。ペストの感染には二種類あって、腺ペストと肺ペストというのですが、腺ペストはネズミノミから感染するもので、1週間ほどの潜伏期を経て、黒死病が発症してから三日ほどで死に至るのが普通ですが、肺ペストは空気感染するもので、先ず肺をやられて、呼吸困難になり、激しく血を吐きながら二日ほどで死にいたりします。教会の司祭たちが死んだのは、主にこの肺ペストだったと考えられ、時には自分が看取って臨終の告白を聞いた患者より先に死亡する司祭もあったと伝えられています。

「司祭たちの多くは良心的にみずからの責務を果たした。そしてペスト患者に恐れることなく臨終の秘跡を与えた。そのあとで司祭たちは、経験がそれを教えたのだが、多少の早い遅いはあるものの自分も間もなく死ぬだろうと予感していた。シモン・ド・クヴァン Simon de Couvin はアヴィニヨンの教区聖職者の勇気を次のように記している。『荒れ狂う疫病は、聖なる魂の救済者すなわち司祭たちが病人に恵みの賜物を与えようとするまさにその瞬間に彼らを不意打ちした。突然司祭たちは死に見舞われた。ときどき、当の病人より早く、病人の身体に触れたか、ペスト患者の息を吸ったかした、というだけで』²¹⁾。

当時の一般人のペストによる死亡率はおよそ三分の一でしたが、司祭に限っては半分から60%の死亡率だと言われています。特に、修道院の修道士たちの犠牲者が多くて、全滅したという修道院もめずらしくありません。平の修道士は大部屋で共同生活をしていましたから、一人が感染すると、あっという間に全員に広がったのです。また日頃から、たとえば受難節の断食などで栄養状態が悪かったということも、生存率が悪かった原因です。また修道会の中には、たとえばフランチェスコ会やドミニコ会のように、病人の世話をしたり、貧民救済事業に使命感を持っている修道会が多く、その人々はほとんど生き残れませんでした。イタリアのヴェネツィアのスクオー

21) Joseph P. Byrne, *Encyclopedia of the Black Death*, ABC-CLIO 2012, art. Clement VI.

22) Bergdolt, op. cit., S.163.

ラ・デラ・カリタというのは、正式の修道会ではなく、在俗の慈善団体ですが、300人ほどのメンバーの中で、生き残ったのはたった一人だったと伝えられています²³⁾。フィレンツェのドミニコ会修道院サンタ・マリア・ノヴェッラでは130人の修道士のうち80名が死亡しています²⁴⁾。アヴィニョンのカルメル会修道院では66人の全員が死亡²⁵⁾。北ドイツのマリエンフェルデの修道院も全滅です²⁶⁾。

中世は、聖職者の養成には非常に長い期間が必要でした。正式には10年間、多くの学問を学ぶ必要があったのです。その人々が一挙に半分以下に減ってしまったのですから、当時の教会がまともに機能しなくなったことはじゅうぶん想像できます。

この危機の時にあたって、教会は社会への指導的な役割を果たせませんでした。ペスト以後の時代、司祭不足を埋め合わせるために、粗製乱造された司祭たちが大勢生み出されて、教会の評判をますます落としてゆきます。それは15世紀から17世紀の宗教改革運動の始まる一つの原因であったと思われるのです。

6. まとめ（希望なき場所での希望）

以上、私たちは14世紀のヨーロッパを襲ったペスト（黒死病）について学んできました。当時の教会は、これに対して有効な対策を取ることができませんでした。ペストの原因ですらわからなかったのです。この病気はヨーロッパのすべての町々を襲い、荒れ狂い、人々の苦しき嘆きと、大きな死体の山を残して、何カ月か後に、やはり原因を説明できないままに去っていきました。それは、台風がやってきて、やがて去ってゆくようなものであり、まさに巨大な自然災害であったのです。

黒死病の原因がネズミノミの媒介するペスト菌（異説もある）だとわかる

23) *ibid.*, S.57.

24) *ibid.*, S.61.

25) *ibid.*, S.67.

26) *ibid.*, S.83.

のは、19世紀の終わりでした。ですから、中世の教会が有効な対策をとることができなかったのは当然であり、この点で彼らを責めることはできません。

彼らに責任はないとしても、それでは彼らは、この自然災害から何を学んだのでしょうか。私はそれについて二つのことを述べて、この講演の締めくくりにしたいと思います。

(1) 記憶し続けるということ

一つは、これは中世ヨーロッパ社会を称賛して言うのですが、彼らはこの病気を理解できなかったけれども、しかしそれを記憶しつづけたということです。それは恐怖に満ちた記憶であり、明瞭な記憶ではなくて、むしろトラウマのようなものだったのですが、とにかくそれを忘れなかったということです。そしてそのことから、ヨーロッパの近代というものとは始まったのだということが出来ます。

考えてみると、黒死病という病気は、ヨーロッパに入ってくるよりも前に、黒海沿岸地方とビザンチン帝国、さらにその前には中央アジアから中国にかけて、非常に多くの国々で荒れ狂ったはずですが、しかしそれらの国々では、もちろんまだこれからいろんな記録が発見される可能性はありますけれども、ヨーロッパ社会のようにこの疫病を人びとの記憶や記録に残すことができませんでした。ペストの記念碑を立てたり、文書を残したり、絵に描いたり、歌に歌ったりするということがありませんでした。

ヨーロッパでは、疫病を直接嘆いた詩もありますけれども、たとえばマザーグースのいくつかの童謡にも、ペストとの関係が指摘されています。

Ring-a-Ring o' Roses

Ring-a-Ring o' roses, バラの花輪になって踊ろうよ
A pocket full of posies, ポケットには花がいっぱい
A-tishoo! A-tishoo! ハックション! ハックション!
We all fall down. みんな 一緒に倒れよう

この歌の中のバラはペストの発疹を、花束は薬草を、ハックションは病気の末期に起こるくしゃみを表し、最後には全員倒れる、つまり死ぬのだというのです。これは子どものお遊戯歌でありまして、手をつないで輪をつかって回りながらこの歌を歌う。最後に「みんな一緒に倒れよう」のところでいっせいに尻もちをつくののです。これがペストを歌ったのだとすると大そう不気味です。

この歌が本当にペストの思い出を歌ったのかどうかは、はっきりしません。歴史的にはそうではないという意見も多くあるのです²⁷⁾。しかし大事なのは、ことの真偽よりも、イギリスの多くの人々が今でもそう信じている、という事実です。ペストを忘れない、忘れられないという文化がそこにあるのだと思うのです。

私たちがまた、今、大きな自然災害と原発事故の悪夢の後にいます。そしてあれを過ぎ去った悪夢として忘れたい、片付けたいと考える人々は、電力関係を始めとして多くいるのです。しかし、忘れないということこそ、私たちが歴史的な試練を通じて学び、必要な社会改革をしてゆくための出発点があります。

私は、アメリカの哲学者、ジョージ・サンタヤーナ George Santayana 1863-1952 の言葉を思い出します。

「過去を心に刻み付けることのできない者は、それをもう一度経験することになる」²⁸⁾

Those who cannot remember the past, are condemned to repeat it.

Die sich des Vergangenen nicht erinnern, sind dazu verurteilt, es noch einmal zu erleben.

27) たとえば、夏目康子・藤野紀男編著『マザーグース イラストレーション事典』
終風舎 2008 年、427 頁参照。

28) 私はこの言葉を二度見ました。一度目は、ヒトラーが最初に作らせたダハウの強制収容所の記念博物館の出口のところでした。重い内容の展示物の数々を見た後の最後のパネルでしたので、身体が引き締まる思いがしました。二度目は、アウシュヴィッツ強制収容所博物館の入り口のところです。この時も心が震えました。

(2) 試みに遭わせないでください

もうひとつは、ペストによる三分の一という死亡率についてです。これは確かに恐るべき数字でありますので、黒死病を人類がこれまでに蒙った最大の災害だと言う人々も多くおられます。確かに、ひとつの疫病によって2千万人から3千万人の死というのは、最大に近い規模の災害であるのは間違いありません。しかし私は、最大ではないと思うのです。現実にも、第一次大戦中のスペインかぜは、世界中で6億人が感染し、5000万人の死亡者があったと言われていました。死亡者のパーセンテージで言うならば、最初に述べた、天然痘による米国原住民の死亡率(95%)は、もっと高いのではないかと考えられているわけです。

ですから、死亡率三分の一というのは、むしろ、一つの社会が災害を受けて、そこからもう一度立ちあがってゆくことのできた、限界の数字ではないかとも思うのです。人類の歴史の中には、もっと苛酷な状況があった。あまりにも被害がひどすぎて、もはや立ちあがれずに滅亡してしまった民族がいくつもあるように思うのです。

旧約聖書を読んでおりますと、そのようにして滅亡してしまった民族はいくらでも数え上げることができます。巨大な文明でも同じです。

ですから私たちにできることは、ある意味では今も変わりなく、「主の祈り」を祈ることだと私は思うのです。「われらを(あまりにも大きな、再び立ち上がれないほどの)試みには遭わせないでください」と祈ること。私たちが自分の力を過信しないで、様々に努力をしつつも、神さまに救いを祈り求めること、それが今日の状況における私たちの希望の根拠だと私は思うのです。

ご静聴ありがとうございました。